
● 「構造改革派」の頃―一九六五年十二月の古いノートから

一九五〇年代はじめ、私は中国問題の研究所から労働問題の研究所に移り、もっぱら労働経済論や労働運動論などの研究に従事していた。五〇年代末から六〇年代始めにかけて、社会党、共産党をまき込み、革新陣営を二分する形で「構造改革」論争(注)が展開されていたが、私は佐藤昇さん(評論家、岐阜経済大教授、故人)らとともに社会党の構改革派のリーダー江田三郎グループの理論・政策集団(現代社会主義研究協会)にコミットし、理論誌『現代社会主義』の企画・編集などに参加していた。長洲さんも雑誌『現代の理論』の編集代表として既成革新理論の革新のための論陣を張っていた。

(注)五〇年代半ば、ソ連型社会主義と決別した西欧最大のイタリア共産党が提唱した先進国型の社会主義改革路線をめぐる論争。日本では社会党右派の江田三郎書記長が教条主義的左派路線を克服すべく日本型構改革路線(モデルは欧州社会民主党)を提唱したが、党内闘争で左派に敗れて失脚した。

また、大学在学中に夭折した親友の妹で、私の郷里で小学校教員をしていた名和美子と結婚したため、東京・中野から東京通勤圏の茨城県取手町に居を移したところ、転居に協力してくれた高橋英典さん(東大経友会、第一次全学連初代書記長、のち朝日航洋社長、故人)によってしだいに町政にまき込まれることになった。高橋さんは東京での政治活動をやめて郷里にもどり、家業の織物工場を経営しながら町議をつとめ、さらに推されて町長選挙に出たが僅差で落選していた。その高橋さんに3か月間口説かれ、町会議員に立候補する羽目になった。

高橋さんのバックアップと地区労(教祖、全農林、全通など)の支援で四九一票を獲得(高橋さんは毎回一二〇〇票を得てトップ当選)、定数三〇人中第八位で当選した(六四年二月)が、これを機に生活が一変した。社会党茨城県本部政務調査部長や北相馬支部書記長に推され、東京の研究勤務のかたわら議会活動、党活動など自治体改革と社会党改革の一翼を末端で担いながら、東京―取手―水戸間を頻繁に往来し、超多忙の日々を送っていた(「I 遙かなる青春」の詩「クリスマスイブ」参照)

しかし、結局、党内左派⇨社会主義協会派との闘いは江田派⇨構造改革派の全面敗北で終わり、江田氏の社会党追放とともに私も社会党を離れた。社会党を西欧型社会民主主義の党に変革しようとした構造改革派の挑戦は挫折し、日本における革新運動再生への胎動は圧殺され、その後の社会党の衰退、消滅、革新勢力の衰退、長期低迷につながった。

今日もまた政治論議に疲れ果て 実存の淵に心を癒す

実存の深みよりもますます離れゆく 政治論議の空し哀しき

参謀は居れど指揮官なき集団　さりとしてわれも指揮官にあらず

政治集団の参謀たるは難きかな　さらに難きは指揮官たること

評論と実践の間の深き溝　ため息ばかりで越える人なし

調子よき言葉を言うも実（じつ）のなき　人と知れる日心冷え込む

意気込んで発言終えしその後　後悔の念苦水（にがみず）のごと湧く

駅頭に三百人が集いけり　わが街頭演説は朝六時半

夜遅く議会議長訪ねきて　明日の質問とりやめにせよと

会議終え利根の河原に降りたてば　月浩々（こうこう）と川面（かわも）きらめく

家貧しうても孝子出でざり何故ならん　社会党の病根かくも深きか

終電に遅れ早朝帰宅せば　玄関開け放しで妻ら寝めり

選挙戦要領覚えし幼子は　門前に立ちてビラを差し出す

こんなにも人なつこき人が大学者　われと酒場で政治を語る

（宇沢弘文東大教授と偶然隣り合う）

しらしらと霰（みぞれ）まじりの降る夜は　火を恋うごとく母恋うる夜